
刹那の風景 ～ 星の破片 ～

緑青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の風景 〳 星の破片 〳

【Nコード】

N2351U

【作者名】

緑青

【あらすじ】

このお話は、本編刹那の風景の番外編みたいな感じでかかれる小説です。

本編をご覧になってから、読んでいただけると嬉しいです。

本編と重複する部分も多いのでご了承ください。

主要人物以外のこぼれ話などになる予定……です。

『 午後の庭での短編集 』（前書き）

とても短い話を三つほど……お付き合い頂ければ幸いです。
本編ではありませんが、ニヤリと笑っていただけたなら
嬉しく思います。

『午後の庭での短編集』

『午後の庭での短編集』

* かけごと *

最初は、サイラスがジョルジュを冷やかしていたのだ
ジョルジュの腕の中に居る妹をみて、ニヤニヤしながら
その態度と言動に、ジョルジュが不機嫌になっていくのが分かった
のか

ソフィアが、一言サイラスにこういったのだ。

「サイラス様は、好きな方はいらっしやいませんか?」

ソフィアのこの、言動から……口論となった

ユージン様とキース様とサイラス……。

売り言葉に、買い言葉……それがどんどんエスカレートしていき
セツナの元まで競争することになったのだった。

” 負けたら、相手に告白する ” という条件をつけて……。

私は、キース様の騎士として後ろから追いかけることになり、後ろ
を走る。

キース様達は、争いあってまだ気がついていないようだ……。

これだけ、馬を走らせているというのに
一向に目的地に着かないのはおかしい……。

声をかけようと思うのだが

3人は殺気だつて、会話をしているものだから口を挟むのが難しい。どうしたものかと……思案していると、私より馬が異変を3人に知らせる。

馬が疲れてきたのだ、私もまるで遠乗りに行ったような疲れを感じる。

そこでやっと、おかしいということに気がつく3人なのだが……。

馬を走らせようとしても、走れない馬に速度が徐々に落ちていった。

そして……馬がスピードを落としたその時、何かが壊れる音がして周りの風景が変わったのだった。

セツナの冷笑に迎えられ……。

私と馬だけに、回復魔法をかけてくれたセツナ……。

息を切らしながら、ユージン様達はラギさんに挨拶し

体力が回復するまで、ラギさんの家で伸びていたのだった。

ジオルジュが、サイラスに向かってニヤリと笑い

サイラスが不機嫌になったのは言うまでも無い。

- E n d -

* 主役には…… *

「ソフィアさんも、エリーさんも恋人が居るのにセツナさんのことが気になるのかの？」

私がそう二人に尋ねると

ソフィアさんとエリーさんが顔を見合わせエリーさんが答える。

「ラギさん、それはそれなんです。」

ノリスは好きな人で、セツナ君はなんと言うか目の保養？」

「ええ、セツナ様はなんと言うのか……。
お話の中に出てくる、騎士様みたいな」

「そうそう、色々凄すぎてそういう対象に見れないよね」

「お話の中のお姫様に、なりたいとは思いませんもの」

「平凡なノリスで十分」

2人の会話を聞きながら、ふと彼女たちの後ろを見ると
なんともいえない顔で、立っている2人の男性。

話に夢中になっている、2人は後ろの恋人たちに気がつくことなく
とめどなく話し続けるのだった。

彼女達の恋人は

話しの内容が内容だけに、ただそこに佇んでいた。
微妙な表情を作りながら……。

私は、彼女と彼等を眺めながら、静かにお茶を口に運ぶことしかで
きなかった。

- E n d -

＊ あのリボンは今 ＊

セツナ様が帰り際、私だけに聞こえるように教えてくれる。

「ソフィアさん、薔薇に結んであるリボンの言葉なんですが
薔薇から、リボンを解くと消えた文字が浮かび上がるようになってます」

セツナ様の言葉に、私は思わず彼の董色の瞳を凝視する。
優しくゆれる彼の瞳、なのにセツナ様の口元は楽しそうに笑っていた。

「僕からの……贈り物です」

楽しそうに笑うセツナ様。何が彼を楽しませているんだろうと考えるけれど、その答えは私には分からなかった。

「ソフィアさん、僕とのこの会話は……。
ジョルジュさんには黙っていてくださいね？」

そういい残して、彼はサイラス様の元へと行ってしまった。

帰りも、ジョルジュ様の馬に乗せてもらっている私の耳のそばで
ジョルジュ様が問いかける。

彼の声が耳元で聞こえて、心臓が高鳴った。
この鼓動が聞こえるぐらいの距離に彼が居るというのに……。

「ソフィア……セツナは君に何を話していた？」

「え……？」

「セツナが君に何か話していただろう？」

「ええ……」

歯切れの悪い、私の返事にジョルジュ様が顔をしかめる。

「セツナに何を言われた？」

「……」

秘密だといわれていることを、答えるわけには行かない。

「……今君はとても幸せそうに笑っている。

それは、セツナが君に与えたものだろう……？」

彼のこの言葉に、私の体に緊張が走る。

私は、リボンの文字をもう一度見ることができるといのが嬉しくてその喜びが、体からあふれていたみたい……。

「私には、話せないことか？」

彼の真剣な問いかけに、私が答えないという選択肢は無くセツナ様に教えてもらったことを、あっさりとジョルジュ様に白状する。

「……」

「ジョルジュ様？」

ジョルジュ様の体が急に固まる。

その変化を敏感に察したのか、馬の首が少し不機嫌そうに揺れた。

「……ソフィア……」

「はい」

「……薔薇からリボンを外さないように……」

「……あ……」

彼のリボンを外すなという言葉に、不満を言おうと振り向くと……
ジョルジュ様と視線が合った。

困ったような、照れたような、そんな表情の彼を見るのは初めてで……。

私まで釣られて、照れてしまう。

セツナ様が、楽しそうに笑っていた理由。

きっと、セツナ様は私が彼に話してしまうことを分かっていたのだらう。

そうして、引き出される彼の表情を想像して笑っていたのだ。

『僕からの贈り物です』

そう……セツナ様の言う贈り物というのは

薔薇のリボンの文字を浮かび上がらせることを教えてくれたことではなく彼のこの表情なんだろうなと思った。

めったに見ることができない、彼の心の表情……。

今日は新月で……私の顔の色もジョルジュ様の表情も周りには分からないはず……。そのことに少し安堵しながら私とジョルジュ様の間には、優しい沈黙が続いたのだった。

- E n d -

* あるとのにっき *

・・・（抜粋）・・・

えもの（サイラスさん）がわなにかかった。
うれしかった。

えもの（サイラスさん）は、おれのとなりで、ぐったりしていた。
これで、おれのたべものが、とられることはないだろう。

きょうは、たのしい、いちにちだった。

- E n d -

* セツナの返事 *

ほかのひとには、くねくねもやらないように。
ゆうしょくに、まぜることもきんじです。

- E n d -

『 午後の庭での短編集 』 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

『 建国祭での短編集 』（前書き）

セツナと王妃の打ち合わせの話です。
短くて本当にすいません……。

『 建国祭での短編集 』

『 建国祭での短編集 』

＊ 召喚呪文？ ＊

「僕を呼び出すための言葉ですが……」

僕は少し、ぐったりしながら王妃様と建国祭の打ち合わせをしていた。

この衣装を着て欲しいとか、この言葉を言って欲しいとか演劇でもするんですか？ という感じの要望に

僕の顔は引きつったまま、戻らなくなるかもしれない。

そんな僕を、全く気にすることなく楽しそうに計画を詰めていく王妃に

ため息が漏れつつも、無理なく笑っている王妃を見ると仕方ないかと言う気になってしまふのである。

「セナ君を呼び出す呪文！？」

「……」

「呪文……。ちょっと迷っぱいよね？」

瞳をキラキラさせながら、僕の言葉を脳内変換してくれる王妃に言葉が出ない。

あえて、そこは気がつかない振りをする。

「僕の名前を呼ぶだけで、魔道具が発動するように魔法をかけておきますから」

「……」

僕を呼び出す言葉が僕の名前だと告げた瞬間、王妃の顔が不満げにゆがむ

その不満を聞きたくは無かったのだけど……王妃は依頼主だ。

「なにか？」

王妃はこれでもかというほど、深いため息をつき僕に、言い聞かせるようにゆっくりと理由を話した。

「あのね、セナ君。

名前を呼んで助けに来る役目は、最愛の人だけなのよ？」

「……」

「セナ君の名前を呼んで、魔道具が発動するのはどうかと思っわ」

それはそれは、真剣に語る王妃。

僕は、色々諦め王妃に告げる。

「王妃様が決めてくれていいですよ……」

僕のセリフにとってもいい笑顔を僕に向け

ここは、騎士がお姫様を守るために呼び出される場面だからかっこのくないと！

と力説し、正直それで呼び出される僕は、恥ずかしくて仕方が無い

のだけと思いながらも

王妃の要望を取り入れるしかなかったのだった。

……当日、着替え中に呼び出されることになるなどとは
このときの僕には、考えもつかなかったことである。

- E n d -

* 魔道具 *

僕を呼び出す為の呪文？ が決まり魔道具に魔力を込めようとした
ときに

王妃が魔道具を見て一言。

「かわいくない」

普通、魔道具は宝石類か魔力をためやすい石などが使われることが
多い。

だから、魔道具に可愛いも、可愛くないも無いと思うのだが……。

「魔道具ってこういうものですね？」

僕が用意した魔道具は、手のひらで握れるぐらいの石で僕が作った
ものだ。

「そうだけど……」。

こつ……もう少し大きいものとか……光るものとか？」

「……王妃様は、魔道具に何を求めているんでしょうか……」

「だって、普通過ぎるんですもの」

「普通が一番だと思いますよ」

「そうだけど、お祭りの日なのよ！

普通じゃなくてもいいと思うの！」

僕は、お祭りじゃなくても

王妃はきつと、可愛くない！　というに決まっていると思ったけれどそれを口に出すことはしなかった。

記念になるようなものがないとか、可愛くないと嫌だとか

色々と要望を出してくれるのはいいのだけど……具体的にどういうものがないのか

その物自体を言わない王妃に、僕は少し面倒になりカバンの中であるものを作り出す。

「じゃあこれで……」

変更はしないという感じでカバンから出したものに少し首をかしげて凝視する王妃。

「セナ君、これはぬいぐるみ？」

「そうです。

可愛い（・・・）でしょう？」

僕は、可愛いというところを強調する。

「うん、かわいいけど……」

「使い終わった後は、普通のぬいぐるみとしてつかえますしね」

「そうだけど……これは何？」

羽があるけど鳥なの？ でも、このずんぐりとした体じゃ飛べないわ？」

「この鳥は飛べませんが、とても早く泳ぐことができますよ」

僕の説明を楽しそうに聞く王妃、ぬいぐるみの説明が終わると手にとって、ぎゅうっと抱きしめる。そして僕に視線を移して

「気に入りました！」と一言。

僕は、決まったことに安堵して王妃からぬいぐるみを受け取りそこへ魔力を注いでいく。魔力を注いだ魔道具を王妃に渡し当日まで、誰にも見つからない場所へ隠しておくことと注意をしてから

王妃との打ち合わせが終了した。

嬉しそうに、ぬいぐるみを抱きしめて帰っていく王妃の背中を見送った後

依頼の内容はとても単純なものなのに

王妃のせいで、色々と複雑になってしまった段取りに僕はため息をつきながら

木の葉の酒場の奥の部屋で1人、冷めてしまった紅茶を口にした。

- E n d -

あとがきに、薄浅葱がつくった魔道具になったぬいぐるみがアップされた

アドレスが張っております。よろしければ見てあげてくださいませ。イメージが壊れると思われる方はスルーして下さい。

『 建国祭での短編集 』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

薄浅葱作

<http://2188.mitemin.net/i20524/>

『お城での出来事』

失敗したと思ったのは城についてからだった……。

この4日間、色々な意味で神経が高ぶっていた僕は眠る事も出来ず……。強盗や冒険者をギルドの牢屋に送りながらラギさんの眠る場所が、寂しく見えて……。ひたすら花を植えていた。

僕の自己満足なのは分かっていたけれど。

動いてないと、何かに押しつぶされそうだったから……。

気がついたら、水分は取っていたけれど食事はとっていなかった。食べたいという、欲求すらなかったのだから仕方が無いと思う。

サイラスが、酷い姿だと言ったけれど話半分に聞いていたし自分の姿が、どうなっているかなんて

気にしている余裕がなかったのかもしれない。

サイラスとアルトに促されるまま、城まで来たのはいいけれど着替えて来ればよかったと、城についてから思った。

4日間、動き続けて泥だらけなのだ……。

これで、国王様に会うとか、さすがに失礼に当たる。

そう思い、サイラスに着替えに戻ると伝えようとした瞬間……。2人分の、悲鳴が聞こえた……。

「なんていうこと！ セツナ君！ どうしてそんなにやせているの！」

「セツナ様！　どこかお怪我を！？」

王妃様とソフィアさんは、アルトを探していたらしい。

アルトを見つけて、一目散に走ってきて……僕を見て悲鳴を上げた。

王妃様も、ソフィアさんも青い顔をしている。

怪我などしていない事を伝えると、王妃様もソフィアさんもホッと息をついて……2人で何かを話し出した。

2人の悲鳴を聞きつけて、ユージンさんやキースさん達が駆けつけてきて

そして、彼等が来るという事はもちろん

ジオルジュさんや、フレッドさんも居るわけで……。

みんな僕を見た瞬間、息を吞んで目を見開いていることからサイラスの言った通り

僕は本当に酷い姿をしているらしいと、ここで気がついたのだった。

皆が僕を凝視する中、やっぱり1度戻って出直そうと思い

「申し訳ありません、1度戻って着替えてきます」というより早く

「帰さないわよ、セツナ君……」

そう言つて、王妃様が僕の右腕をとった……。

汚れますよと声をかけようとした瞬間

「帰しませんわ、セツナ様

帰ったら、暫く来ない気がしますもの」

とソフィアさんも、僕の左腕を取った……。
2人の行動に驚き、固まっていると

王妃様とソフィアさんが、視線を合わせ頷き

僕を引っ張っていく。僕は慌てて、彼女達を止めようとするが

「ちょっと、ちょっと待ってください！

僕、泥だらけなんですが！」

「だから、お風呂に入るのよ！」

「お風呂場が汚れますよ！」

「お風呂は、汚れを落とす為の場所ですわ」

王妃様とソフィアさんが、抵抗している僕を引っ張る。
何処にそんな力があるんですか！？ と僕は言いたい。

「え！？ いえ、一旦帰ってまた来ますから！」

「駄目よ、何処で入っても一緒でしょ。

私の騎士がこんなに、よれよれになって帰ってくるなんて！」

よれよれ……。確かに、よれよれかも知れないけれど

よれよれ以前に、僕は、王妃様の騎士ではないんですが……。

そう告げようと口を開いた瞬間、左側のソフィアさんが

「そうですわ、セツナ様……。

私の王子様のイメージが……」

え……？ え！？ ソフィアさんの王子様はジョルジュさんでしょ！？

王子様のイメージ、ジョルジュさんでいいじゃないですか！

大体、本物の騎士も王子様もいるのに

それを僕に求めるのは、どうかと思うんですが、などと

つつこみたい所はたくさんあるのだけど、2人の剣幕に押され歩かされる。

左右から聞こえる、2人の会話に口を挟む隙もない……。

少し慌てながら、視線を感じたほうに目を向けると国王様と目があった。

謁見室から執務室に、移動するところだったようだ。

「助けてください」と目で訴えた僕に、国王様はやりわりと笑い首を横に振った。

「私では無理だ」そう瞳が語っている……。連行されている途中で大臣や將軍とも会ったのだが、大臣達は可哀想な子を見る視線で將軍は、殴りたくなるような顔で僕を見送ってくれたのだった……。

そして僕は、お風呂場まで連行され。

服を脱がしにかかる、王妃様を風の魔法で縛り

王妃様とは違い、乙女そのままの反応を見せているソフィアさんに渡し

2人を追い出してから、諦めてお風呂を借りた。

浴槽は広く、とてもいい香りがして心が休まる。

アルトに色々教えていた、ダリアさんじゃないけれど

女性の勢いは侮れないと、初めて実感した僕だった。

お風呂から上がると、服が一揃えおいてある。

それを広げてみると、王妃様の趣味が丸分かりの服だった。

もちろん僕は、カバンから自分の服を取り出し

王妃様が用意した服を着ることはなく

その服を、着なかった事で王妃様が少し拗ねた。

こういう服は、自分の息子に着せればいいと思う。

そう伝えると、ユージンさんが「止めてくれ！」と叫び

キースさんとサイラスは、そつと王妃様の視界から消えた。

そして、ソフィアさんが口を開こうとしたのを

フレッドさんが、慌てて手で口を塞ぎ黙らせる。

ジョルジュさんは、王妃様の持っている服を

青い顔をしながら、見つめているのだった。

- E n d -

『お城での出来事』(後書き)

読んでいただき有難うございます。

『疑問は師匠に』 (前書き)

*
アルト視点

『 疑問は師匠に 』

師匠が、王妃様とソフィアさんに連れられて行ってしまった。王妃様とソフィアさんに、城を勝手に抜け出した事を謝ろうと思っていたのに……。

誰も、王妃様とソフィアさんを止めることが出来なかった。俺もそのうちの一人だけど……師匠大丈夫かな……。

師匠の事を心配していると

後ろでサイラスさんが、ジョルジュさんに話しかけている。

「おい、ジョルジュ……。

ソフィアの王子様はセツナだといってるぞ」

「……」

「お前、結婚を目前にして破局か？」

「……黙れ」

ジョルジュさんが、うつすらと殺意をサイラスさんに向ける。フレッドさんが、ジョルジュさんを軽く叩いた。

「サイラス、ソフィアの言う王子様は

一般的にいう、恋愛対象ではないんだよ」

「女が言う王子様って、結婚したい男って事だろう？」

「まあ、普通はそうなんだけど……」。

ソフィアの場合、結婚相手はジョルジュと決めていたから
ソフィアの王子様は、鑑賞して楽しむ人？」

「なんだそれは……」

「特にセツナ君は、あの物語の王子様に似ているしね」

「あの物語？」

フレッドさんの、あのという言葉にサイラスさんだけではなく
ユージンさんも、キースさんもジョルジュさんもフレッドさんを見
ている。

「数年前に、発売された……闇に抱かれた王子っていう話」

「……」

「……」

「……」

「……」

全員が口を噤んだ。俺はその話を知らない。

「さてよ、あの本は発禁になっていただろう」

「発禁になる前に、読んだんだよソフィアは
知ってるって事は、サイラスも読んだことがあるってことだね？」

「ああ……興味本位で、処分される前のものを読んだ。
ユージンやキースも読んでるぜ？」

「それはどうかと思うけど……。
その王子様の姿絵が、セツナ君に似ていなかった？」

「確かに似ていると言えば、似ているな」

キースさんが、フレッドさんの言葉を肯定した。
師匠に似ている、王子様の物語ってどんな話なんだろうかと
とても興味がわいた。

ジオルジュさんは、終始無言でユージンさんは楽しそうに目を細め
ている。

「だけど、あの王子ってきち……」

「あの王子は、どえ……」

ユージンさんとサイラスさんが、同時に何かを言いかけるが
途中から話が聞こえなくなる。誰かが俺の耳をふさいでいた。

顔を上に向けると、ジオルジュさんと目があう。

真面目な顔で、俺の耳をふさいでいるジオルジュさん。
耳をふさがれながら、首をかしげるとジオルジュさんが少し困った
顔をした。

サイラスさん達の話が、加熱しているところに
ジオルジュさんが、何かを話すと全員が俺のほう見て

ジョルジュさん同様、困った顔をしていた。

やっと、ジョルジュさんが耳から手を離してくれる。
少しふにやけた耳を動かして、耳を立てる。

「とりあえず……教育に悪い事は言っな」

「確かに、アルト君にはまだ早いかな？」

ジョルジュさんの言葉に、ユージンさんが頷きながら答えた。

「とりあえず、その王子の性格がどうであれ
一途に愛を貫いたってところが、女性に人気があつたみたい」

俺の耳の動きを、フレッドさんが追いながらそう締めくくり

「女性の感性は、たまに理解できないな……」

キースさんが、ため息をつきながらそう呟いた。
結局俺には、その物語がどういふ話なのか全然分からなかった。

俺達が、部屋に向かって歩いていると

師匠が、王妃様とソフィアさんと一緒に歩いてくる。

「師匠」

俺は、師匠を呼んで師匠のそばまで言っ
て気になっていたことを聞いた。

「師匠、闇に抱かれた王子って師匠に似てるんだって

どんなお話、なんですか？」

僕のこの言葉に、その場の空気が凍った気がした。特に、師匠からとても冷たい何かが流れている気がする……。俺の後ろからは、息を呑む音が聞こえた。

俺は、師匠の後ろのソフィアさんに目を向けるとソフィアさんは、どこか一点をじっと見ている。

「アルト？ そのお話は誰から聞いたのかな？」

師匠が何時も通り、優しく俺に声をかけ俺は正直に後ろを振り向いた。

みんなの顔色が少し悪い……。首をかしげて見ているとソフィアさんが

「お兄様、少しお話がありますの……」

「僕は、今仕事だから……無理……かな？」

フレッドさんの額に、汗が浮いている……。

「……キース様、少々兄をお借りしたいのですが？」

ソフィアさんは、笑顔なのに……なぜか口を挟んではいけない雰囲気を感じている。

「……あー……フレッド、こちらは気にしないでいい」

キースさんが、フレッドさんにそう言うとソフィアさんは

フレッドさんの腕を取って、あっという間にどこかに消えてしまった。

師匠が軽いため息をつき、俺を見て俺の後ろを見る。

「アルト、そのお話はね、この国では発売禁止になった本なんだ。だから、読むことが出来ないんだよ。だから、忘れようね？それに、僕とは全然似てないからね？」

とてもキラキラした、笑顔で俺に告げる師匠の目は俺ではなく後ろの人達に向けていた。師匠に笑顔を向けられているというのにサイラスさん達は、蛇に睨まれた蛙のように固まっていた。

王妃様は、俺を見て首を傾げ
俺も、王妃様を見て首を傾げる。

俺と王妃様の疑問をよそに
その、冷たい空気は暫くの間続いたのだった。

『 疑問は師匠に 』 (後書き)

読んでいただき有難うございます。

『殺虫剤』(前書き)

*
アルト視点

『 殺虫剤 』

師匠が青い顔をしながら、お腹の辺りを押さえている。歩き方も、トボトボという感じでとても辛そうだった。

「師匠、大丈夫？」

「……もう暫くは、食べ物を見たくないかな……」

「王妃様とソフィアさん怖かったね」

「……そうだね……」

師匠がお風呂を上がって、みんなでご飯を食べる事になった。その時に、師匠が軽くスープだけでいいですというところ、王妃様とソフィアさんが、師匠のお皿に次々と料理を盛っていったのだ。

師匠のお皿に、料理を盛る2人の気迫……？
みたいなものに、俺も師匠もそして周りの人も誰も何も言えなかった。

「4日ぶりの食事だったから……軽くすませたかったんだけどね
とりあえず、僕は薬を飲んで少し横になるよ……アルトはどうするの？」

「俺は、何しようかな？」

勉強しようか、訓練場に行こうか迷っていると

中庭のあたりから、話し声が聞こえてきた。

師匠にも聞こえてるみたいだ。

「なあ、あのソフィアって言う侍女可愛いよな」

「確かに」

「ちょっと、声かけてみようぜ」

「大人しそうだしな……」

「あいつらにも、声をかけてみるか？」

「また、あのゲームをするのかよ」

「それでもいいな。」

「ちょっと、ルールを変えようぜ。」

「手を握れたら、5点。口付けで、10点。やったら30点」

「王妃様つきの侍女だぞ、それはまずいんじゃないのか？」

「脅せば大丈夫だって」

「わかったよ、あいつらにはお前が話しとけよ」

「ああ」

そう言っつて、2人はどこかに行ってしまった。
話しの意味は、余りよく分からなかったけど

ソフィアさんが、危険かも知れないということはなんとなくわかった。

「師匠……」

師匠のほうを見ると、難しい顔をしながら何かを考えている。そして、笑いながら俺に

「アルト……虫取りってしたことある？」

「虫取り？」

「そう。この場合は害虫駆除ともいうんだけどね？」

「ない」

「じゃあ、やってみる？ 面白いかもしれないよ？」

「うん、やる！」

あ……でも、ソフィアさんどうしよう？」

「大丈夫、アルトが上手に出来たら

ソフィアさんを、守る事が出来るからね」

俺が、わからないという風に首を傾げると

「まあ……人間の頭の中に入り込んで

悪い事を考える ” 虫 ” を退治するって考えればいいよ」

「そんなのがいるの？」

「いるの。その虫は、可愛い女の人が大好きなんだよ。それで、女の人に噛み付こうとするんだよ。」

普通は、恋人や旦那さんが守るんだけど……ジョルジュさんは忙しそうだから

変わりにアルトが、虫を退治してあげるといい」

「わかった!」

師匠から、虫を退治する為の道具を渡される。

虫を殺す為の薬がはいった、どنگりみたいなものとスリングショットと呼ばれるもの。そして、黒い手袋。

「その手袋をして、この薬の入った弾を触るんだよ。」

他の人には、絶対触らせないようにね?」

「はい」

「そして、この薬の入ったものをこの布を張ったところにおいて引っ張る。するとこの紐が伸びるから……伸び切ったところで指を離す!」

師匠が、説明しながらスリングショットバチンコというものの使い方を教えてくれた。

「この弾が頭に当たると、中の薬が頭にかかって虫が退治できるからね」

「でも、誰に薬をつければいいの?」

「ソフィアさんの後をつけて

僕が悪い虫が頭に入った、人の頭の上に目印をつけておくからね」

「はい」

「アルト、この虫はとても臆病だから

周りに人がいると出てこないんだ。だから、気配を消して
誰にも見つからないようにしないといけない」

「ソフィアさんにも、見つかったちゃだめ？」

「うん、駄目。出来るかな？」

「出来る！」

俺が、自信満々に答えると

師匠は軽く笑って、頭を撫でてくれた。

「師匠、この薬をつけるとどうなるの？」

俺は少し気になったことを聞く。

「不能になる」

「不能？」

「うーん……半年間ぐらい、女の人に噛みつけなくなるんだよ。

薬が当たったら、その場で気を失うから、そのままにしておく
いいよ」

「へー」

「強力な薬だから、悪戯に使わないようにね」

「はい」

「それじゃ、行ってらっしゃいアルト」

「行つてきます！」

俺は、師匠にそう言ってから
ソフィアさんの気配を探した。

すぐに、ソフィアさんを見つける事が出来た。

本を両手に抱えているから、本を返しに行くところかもしれない。

そこにそっと、誰かが近づいてくる気配がする。

気配を感じたほうへ視線を向けると、頭の上に鳥が乗っていた。

師匠の目印だ。

俺は、慎重に薬をスリングショットに置いて
紐をキリキリと引っ張り……その人物の頭にめがけて放った。

その薬が、当たった瞬間

男の人が倒れて動かなくなる。

ソフィアさんは、物音がしたほうを少し見て
何も無いとわかると、そのまま歩いて行った。

ソフィアさんが移動するたびに、師匠の目印をつけた人が現れる。
4人ぐらい退治したところで、俺は……ジョルジュさんとフレッド

さんに
見つかってしまった。

ちゃんと気配を消していたはずなのに……。
少し悔しい。

ソフィアさんに、気がつかれちゃ駄目だと言われていたので
2人に隠れるように言う。

「ジョルジュさん、フレッドさん
隠れて！ 隠れて！ 気配消して！」

2人は俺をじつと見てから、気配を消して一緒に隠れてくれた。

「アルト君は何をしているの？」

「ソフィアの後をつけて遊んでいるのか？」

フレッドさんとジョルジュさんが
少し抑えた声で話しかけてくる。

「えっと、虫退治？」

「虫？」

「うん、ソフィアさんに噛み付こうとしている虫が
いるから、師匠が退治しておいでって」

俺が、師匠と聞いた会話と師匠の話をかいつまんで話すと
ジョルジュさんと、フレッドさんが少し怖い顔をして

ソフィアさんを見ていた。

「そうなんだ……。」

それでどうやって、アルト君はその虫を退治してるの？」

「この薬を、この道具で頭にぶつけるの」

そこで、また別の気配がソフィアさんに近づいてくる。

ジオルジュさんが、飛び出そうとするのをフレッドさんが抑え
フレッドさんが、僕に目をやった。

俺は頷いて、今までと同じようにその薬を放った。
男が倒れる音がして、動かなくなる。

「確かにすごい薬だね……。」
当たっただけで気絶させるのか」

フレッドさんが、僕の持っている薬を触ろうとする。
俺は慌てて、フレッドさんを止めた。

「触っちゃ駄目！」

「どうして？」

「危険な薬なんだって」

「危険なの？」

薬に触れたら、気絶するんでしょ？」

「うん、薬が当たると気絶して

その後、半年間 ” 不能 ” になるんだって」

俺の薬の説明に、フレッドさんとジョルジュさんが固まった。

「……不能……？」

「……半年間……？」

「師匠が、そう言ってた」

フレッドさんと、ジョルジュさんが薬を凝視する。

「アルト君は、不能の意味を知っているの？」

「女の人に、噛みつけなくすることでしょう？」

「……そうだね」

「……」

フレッドさんの顔が引きつっていた。

ジョルジュさんは、無言だ。

「相変わらず……セツナ君のやる事は

えげつないよ……容赦がないよね……」

フレッドさんが、ジョルジュさんに向かって話している。

「ソフィアに手を出すのが悪い……が……」

2人はそこで、静かにため息をついていた。

その後は、誰にも見つからずに虫を退治することが出来た。

ソフィアさんが、王妃様の所に戻ったので虫退治も終了した。

ジオルジュさんとフレッドさんは、俺を部屋まで送ってくれている。

ジオルジュさんと、フレッドさんは最後まで俺と一緒に来て

俺が、薬を頭にぶつけるたびに、複雑そうな顔をしていた。

廊下を3人で歩いていると、フレッドさんがしみじみと呟いた。

「セツナ君が、敵でなくて本当によかったと思うよ……」

「……そうだな……」

ジオルジュさんの、視線はどこか遠くを見ていた。

不思議そうに、2人を見る俺にジオルジュさんもフレッドさんも交代で頭を撫でてから、有難うと言ってくれた。

「アルト君、妹を守ってくれて有難う」

「アルト、ソフィアを守ってくれて感謝する」

2人の、騎士の礼と一緒に言われた言葉に

俺は、少し驚いてそして……すごく幸せな気持ちになった。

俺も、誰かの役に立てたという事がとても嬉しかった。

その事を、師匠に話すと師匠も俺に、お疲れ様といって褒めてくれたのだった。

後日、師匠から貰ったスリングショットバチンコで遊んでいると

サイラスさんが、何時もとは違う真面目な顔で俺に

「アルト、虫退治の薬……絶対俺にぶつけるなよ」と言った。

薬はもう、師匠に返していたし

サイラスさんに、ぶつける筈が無いのになと思いつながら

俺が首をかしげていると、そばに居た師匠が口元を抑えて笑っていた。

『殺虫剤』(後書き)

読んでいただき有難うございます。

『恋って怖い』(前書き)

* ノリス視点

『恋って怖い』

「アルト君は、好きな人はいませんか？」

ソフィアさんが、アルト君にそんな事を尋ねていた。
今この部屋には、国王様と王妃様、ユージン様とキース様
サイラス様とフレッド様とジョルジュ様が居る。

そして、ソフィアさん、アルト君……僕とエリーと１１人でお茶を
飲んでいた。

普通に考えれば、僕やエリーと一緒にお茶を飲む方々ではないの
だが……。

王妃様に誘われて、断る事が出来なかったのだ……。

緊張しながら、席に着いた僕達に

ソフィアさんが色々と気を使ってくれていた。

フレッド様もジョルジュ様も、席に着くことを拒否していたけれど
王妃様の、命令で一緒に席についた。

セツナさんは……ここ数日

女性達から、拷問のように食べ物を詰め込まれたせいか
この時間は、部屋にこもって出てこないらしい。

確かに……あれだけの量をお皿に盛られたら

僕だって逃げ出したいと思う……。

王妃様やソフィアさん、エリーの気持ちも分からなくもないけれど

……。

ラギさんの葬儀から5日目、セツナさんは、息を呑むほど痩せていたから。

だからといって、1人が食べる事が出来る量には限りがあるのだ。

そんな感じで、はじまったお茶会は、王妃様の人柄もあるのだろうとても、賑やかな場となっていた……主に、王妃様とソフィアさんとエリーが……。

ソフィアさんが、エリーさんに僕との出会いを聞き

居た堪れない空気を感じながら、僕は会話に加わらずに黙々と何かを食べる。

そして、僕の話が終わったら

王妃様が、ソフィアさんとジョルジュさんの事を聞いたのだ

ソフィアさんは、とても嬉しそうにジョルジュさんとの事を語り
ジョルジュさんは、気の毒になるぐらい頂垂れていた。

そんなジョルジュさんをみて

フレッド様やサイラス様は

意地の悪い笑いを、ジョルジュさんに向けていたのだが……。

女性達の会話は、とどまることを知らず。

ユージン様やキース様の子供の頃の話、サイラス様の失恋の話など
男性陣にとっては、迷惑極まりない話が次々と展開されていく……。

王妃様が、国王様との話をされた時は

国王様は、とても自然に話しの流れを変えていた。

僕達みたいに、恥ずかしい話の流れが向きかけるとサラリと方向を変えるのだ。

王妃様は、その意図に気がつかず

王様との思い出話に、花を咲かすように語る。

その巧みな舵取りに、僕は憧れを感じ

いつか、国王様みたいになりたいと思ったのだった。

結局、被害にあわなかったのは、国王様とフレッド様とアルト君だけだった。

一通り、身の回りの人の恥ずかしい話を話し終えたのだろうか
ソフィアさんが、ふとアルト君の方を見て聞いたのだ。

「アルト君は、好きな人はいませんか？」とソフィアさんの問いに
みんなが、アルト君に注目する。

「好きな人？ 師匠？」

アルト君の答えに、柔らかな空気が当たりに漂う。

「セツナ様は男性でしょう？ 女性の方はいませんか？
恋愛対象の方は……？」

「恋愛？ 恋？」

「そう、恋ですわ！」

アルト君は、難しい顔をしながら唸った。
そして出した答えが……。

「恋いらない。女性……怖いし……」

アルト君が、顔色を悪くしていった言葉に
全員が、目を見張る。

「修羅場は、もっと怖い……」

正直、アルト君からこのような言葉が出るとは思っていなかった。

「修羅場……？」

王妃様が、興味津々な様子でアルト君に聞く。

「豹変するんだ！

地獄を見せてやるって、叫ぶんだ！」

アルト君は、カタカタと小刻みに震えていた。

何があっただろうか？ セツナさんを巡る修羅場でも目撃したんだ
だろうか。

エリーが、アルト君の背中をさすりながら声をかける。

「アルト君は、恋を知っているの？」

エリーが、アルト君に尋ねると

アルト君が、頷いた。

「恋って、ドロドロした殺し合いの末に
勝ち取るものでしょう？」

「……」

部屋の中に、沈黙が訪れる……。

アルト君の、恋の定義はいつたい何なんだろう……。

「あはははは」

国王様が、声を上げて笑う。国王様とは反対にアルト君は、とても真剣な顔で話し始める。

「俺は師匠に、恋してると思っていたんだ」

アルト君の言葉に、みんなが彼を凝視する。

「どうして、そう思ったの？」

王妃様が、アルト君に尋ねる。

「恋する気持ちっていうのは、離れたくない
ずっと、一緒にいたい気持ちだって教えてもらったんだ」

「確かに……間違っではないいわね……」

「師匠は、俺の好きは家族に対するものだって教えてくれたけど俺も、そう思った。だって、俺……トウーリとクツ力を殺したい
って

思わなかったから」

「どうして……殺さなきゃいけないの？」

「恋を叶えるためには、戦って勝たなきゃいけないんでしょう？」

「えー……。うー……。ん」

王妃様が、返事をどうしようか悩んでいると
国王様が、笑いながら「セツナがそういったのか？」と聞く。

「違う。ダリアさん」

「ダリアさん？」

王妃様が、初めて聞く名前に首をかしげた。

アルト君は、ダリアさんと言う人を説明してくれた。
その人は、本当に女性なのだろうかという疑問が頭に浮かぶ。

朝は、無いのに夕方になると生えてくるという髭……。
ソフィアさんぐらいの、大きな斧を振り回して雄たけびを上げ
筋肉で、服が破れるという女性……。

きっと、この疑問を抱いているのは僕だけじゃないはずだ……。
周りに視線をやると、微妙な表情のまま皆固まっている。

国王様だけは、楽しそうに微笑んでいるが……。
そんな空気を、物ともせずアルト君は話を続けた。
アルト君にとって、ダリアさんはとても印象深い人らしいと
話を聞いていて思った。

「ダリアさんが、乙女は、か弱いから
守るべき対象なのよ！ って言ってたけど。

俺は、守らなくてもいいと思う。絶対俺より強いと思うし……」

また少し、顔色を悪くするアルト君
彼は、いったい何を見たんだろう……。

「その、ダリアさんは強いかもしれないが……。
他の乙女は、弱いかもしれないだろう？」

「他の乙女？」

国王様が、笑いながらアルト君に答える。

「そうだ。例えば、ソフィアとかエリーとか……」

「王様！ どうして私を省くのよ！」

「ああ……王妃とか？」

国王様の言いように、膨れてしまう王妃様。

「そうだね。」

ソフィアさんやエリーさんは、守らないとね」

アルト君は、コクコクと頷きながら納得したようだ。

「アルト君！ どうして私は入ってないの！？」

「王妃様は、乙女なの？」

アルト君の質問に、うっと答えに詰まる王妃様……。
アルト君が真面目に聞いている分、返答に困るのだろう。

国王様は楽しそうに、王妃様を見ているし
サイラス様達は、俯き肩を震わしている。
その様子を、目を細めて不快そうに眺めながら

「女性はいくつになっても乙女なの！」

と王妃様は断言した。その剣幕に、アルト君は少し引いていたが…。

「ダリアさんと……同じ事いう……」

アルト君の言葉に、ダリアさんと言う女性かもしれない人と
同じだといわれた王妃様は、肩を落として黙ってしまった。

「アルトは、乙女とはどんな女性だと？」

「えっと……未婚の女性？」

「ああ、間違っではないいな」

「王妃様、もう結婚してるでしょう？」

「……そうですね……」

そう言って、自分のお皿の上にあるお菓子を
口に詰め込み始める王妃様を、アルト君が不思議そうに見つめてい
た。

僕とエリーも、結婚してはいたけど
金銭的な理由で、腕輪をしていない……だから、アルト君は

僕達が結婚している事を知らないのだろう。

エリーの方を見ると、何も言うなという視線を僕に送っていた……。乙女であるか、ないかは女性にとって重要な事のようなのだ……。

「アルト君はどうして、恋がドロドロしたものだと思ったの？」

エリーが、アルト君のお皿にお菓子を置きながら話を元に戻す。

「ダリアさんが、愛の物語だという本の内容を覚えてくれたんだ」

そう言っ、その時に聞いた本の内容を語ってくれるアルト君……。話が進んでいくと、とても重たい空気が……。部屋の中に漂っている。

そのドロドロとした展開に

顔を引きつらせている、ジョルジュ様とフレッド様。

楽しそうに聞いているのが

国王様と王妃様に、ソフィアさんにエリー。

サイラス様は、おっかねーと呟き腕を摩っている。

ユージン様とキース様は、何かを言いたそうに

サイラス様に、視線を向けていた。

アルト君の語る、愛の物語だろと思われる話は簡単に言っと恋人だった人を捨て、新しい恋人と旅に出ようとしたところを捨てた恋人に見つかり、刺されて殺される話だった……。

なぜ……こんな子供に聞かせる話に

その本を選んだのか……。僕には理解できない。

「でも、俺……殺すなら恋人じゃなくて

相手の女だと思ったんだけど、ダリアさんは

自分の手に入らないなら、殺して自分のものにするのよ！

って言っただ。だけど、好きな人を殺したら、逢えないでしょ
う?。」

「……」

ああ……だから、アルト君はトゥーリさんとクツカさんを
殺せないって言ったのか……。

「恋って怖いよね？」

だから、俺、恋いらいない」

確かに、恋はいろいろな意味で……怖いものだけど……。

真剣な表情で、全員に問うアルト君に……僕は何もいえなかった。

アルト君の、この手に関しての知識は、相当偏っているのが分かつた。

ダリアさんという女性？　がきつと全ての元凶なのだろう……。

アルト君の、ある意味正しく。しかし、根本的に間違っている

恋と言うものに対して、王妃様とソフィアさんとエリーが

話し合っている。どうやら、アルト君に読ませるための本を決めて
いるようだ。

正直僕は……アルト君が、恋を自分で知るまでそつとしておいたほ
うが

いいと思うのだけれど……。

白熱している会話に、入っていける勇気など僕には無かった。
その白熱している会話を止めたのは……国王様の一言だった。

「アルト、セツナの恋もドロドロしていたのかな？」

『恋って怖い』(後書き)

読んでいただき有難うございます

『聞けなかった疑問』(前書き)

* ノリス視点

『聞けなかった疑問』

国王様の一言で、王妃様もソフィアさんもエリーもピタリと会話を止め、アルト君のほうを向いた。

その目には、僕には理解する事が出来ない熱が見え隠れしている。そんな女性達に対して、アルト君の表情はとても暗かった。

「アルト君？」

王妃様が声をかけると、小さな声でアルト君が呟いた。

「師匠は……トウーリを好きだと思っんだ……」

そこで何かを考えるように、口を閉ざしてしまう。

そんな、アルト君の様子を周りの皆が困惑したように見つめる。

ポツリポツリと何かを思い出すように、ゆっくり話すアルト君。誰も、口を挟もうとはしなかった。女性達の顔も真剣な表情になっている。

「トウーリ……顔は笑ってるのに……」

ずっと、涙を流してたんだ……。その笑顔も、凄く淋しそうな哀しそうな顔で……。俺、ここが凄く痛くなっただんだ」

そう言つて、アルト君は自分の胸を掌で押さえる。

「俺、師匠がトウーリのそばに行くと思つてた。

でも……師匠は一度も、トウーリを振り返らなかった……」。

真直ぐ前を見たまま、旅に出た」

アルト君の言葉は、断片的で最初は意味が分からなかったけれどそれが、セツナさんとトゥーリさんの別れを意味しているんだと途中で気がつく。

「俺、師匠がトゥーリの涙に気がついてないんだと思って師匠に教えようとしたんだ……。だけど……」

ギリツと齒を食いしばり、何かが通り過ぎるのを待ってから話を続けた。

「だけど、師匠もトゥーリと同じくらい辛そうな顔をしてた……」

誰も、何も言わない。いや……言えないのかもしれない。ソフィアさんとエリーは、涙ぐんでいるし王妃様も悲しそうな顔をしていた。

「俺……。師匠がどうして、トゥーリの涙をそのままにして旅に出たのか、今でも分からない。でも……。師匠の辛そうな顔を見てから、師匠に聞くことも出来ない……」

アルト君は、俯いていた顔を上げ

答えを求めるかのように、国王様を真直ぐ見る。

アルト君の心の中に、ずっと引っかかっていたんだろうか……。国王様は、複雑な表情を作りながらアルト君を見つめ返していた。

「そうだな。今ここで私が答えをアルトに教えてもいいが……。その答えは、アルトが自分で見つけるほうがいい。なぜ、トゥーリは笑いながら泣いていたのか。」

どうして、セツナはトゥーリが泣いているのを知っていながら
振り返らなかったのか」

「……」

アルト君が、不満そうな顔を国王様に向けている。

「私が、ここで答えを話したとしても

今のアルトには、半分しか理解できないだろう。

それに、私の答えが本当に正しいのか私にも分からない。

私は、その場を見ていないからな。

だから、アルトが自分で答えを見つけるのが一番いい」

国王様の言葉に、納得できない様子を見せながらも

アルト君は、しぶしぶという感じで頷いていた。

「アルト、恋をして初めてわかる事もあるのだよ」

そう言つて笑う国王様は、とても優しい表情をしていた。

アルト君は、首をかしげていたけれど

数年後には、国王様の言葉の意味が理解できるんじゃないかと思っ
た。

セツナさんの恋が、苦しいものだと言った女性陣は……。

ため息をつき、アルト君に何か聞きたそうにしていたけれど
それ以上、アルト君を悩ませる事を良しとしなかったようだ。

そして、その火の粉がサイラス様に降りかかるのは
もう暫くしてからのおはなし……。

『聞けなかった疑問』(後書き)

読んでいただき有難うございます。

『夜の帳に注ぐ酒』 (前書き)

＊ 国王様視点

『夜の帳に注ぐ酒』

夜も更け、私の執務室には静かな空気が流れていた。

今日は少し、仕事を立て込み何時もより遅い時間になってしまったが建国祭を境に、私もそして周りの者達も休息を取るように心がけるようになった。

私が、休息を取らなかったものだから

周りの者も、取る事ができなかったようなものだ。

王妃が、あの時行動に移していなければ皆で、共倒れになっていたかもしれないことを想像すると怖いものがある。

疲れた目元を押さえながら、そつとため息を落とす。

明かりを落とし、自室へ戻る為に扉を開け歩くと私の騎士が後ろをついてくる。

ゆったりと歩きながら、ふと中庭のほうを見ると青年が1人座っていた。

こんな時間に誰が座っているのだろうと、目を凝らすとセツナだった。

表情の無い顔で、空を見ながら酒を飲んでいた。

グラスが2つ用意されているが……1つは、亡くなった英雄の分なのだろう。

数日前にアルトとサイラスに連れられて城に来たときは、目を疑った……。

あそこまで自分を削るとは、誰も想像していなかった……。

リリアとソフィアが、怒りながら世話を焼いていたが
彼にはそれぐらいが、丁度よかったかもしれない。

いつも、落ち着いているがゆえに忘れそうになるが
彼はまだ若い、人に甘えて生きていても許される年齢だ。

16歳で成人といっても

この国では、一人前の大人とみなされるのは20歳をこえてからだ。
ギルドの孤児院でさえ、20歳で孤児院を出たとしても1年は手を
差し伸べる。

16歳から20歳までの、4年間は大人に支えられながら
社会経験を積む為の時間という認識が強い。

アルトにしても、ギルドに12歳で登録できるとはいつでも
実際登録するのは、一握りだろう……。

親が居るならば、親が庇護し
居ないならばギルドの孤児院で庇護するのだ。

ガーデイルでは違うのだろうか……。

あの国周辺は、色々厳しいと聞くからな……。

私は、自室に向いていた足を中庭のほうへ向け歩く。

セツナが、私の気配に気がつき振り向き立とうとするが
それを、手で止めセツナの隣に私も座った。

騎士達が、椅子を用意すると言うが
必要ないと告げる。

「……さすがに、地面に座るのはどうかと思われませんが」

「セツナだって座っているだろう？」

「僕は、王ではありませんからね」

そう言って肩をすくめるセツナを
適当に言いくるめて、私も夜空を仰ぐ。

奪った王座についてから
こうやって、地面に座り空を仰いだ記憶は無い。

セツナは、カバンからグラスを取り出し
私に、酒を注いでくれる。それを受け取り一気に喉へ流し込んだ。

「美味うまいいな……」

「それはよかったです」

「少し肩の力を抜いてから
酒の味が戻ってきたな……」

「そうなんですか？」

「ああ……」

私が、父を殺し、兄を殺しこの国の国王という座を奪い取った。
その事を、後悔した事は無い。

だが……私は、王位継承権を持たなかったから
帝王学を学んでこなかった……。

良い王というものが、どういうものかわからなかった。

悪い王なら、ずっと目にしてきたが……。

理想を現実にする為に、走り続け……。

將軍も大臣達も、私と同じぐらい走り続けてきた。

王である私を支えて。

友である前に……臣下として……。

それが当たり前だと、他国の王は言うだろう。

確かにそうかもしれないが……。考え込む私にセツナが口を開く。

「仕事と私事を、区別できるのなら

多少、肩の力を抜いてもいいんじゃないでしょうか」

「……」

「その国々で、色々違うのですから

比較する必要は無いかと思えます。

国を治めるのに、威厳も体裁ももちろん必要ですけどね」

私の気持ちを讀んだように、セツナが話す。

「それに、王妃様が王妃様らしくないので

国王様が、少し肩の力を抜いてもそう変わらないと思います」

「王妃らしくないか……」

「王妃様が、ご自分でそう言っていましたよ」

セツナの言葉に、苦笑を返すことしか出ない。

「成すべき事を、成しているのならば

息抜きしても、許されるんじゃないでしょうか」

「……」

「よその国では、何も成さずに遊んでいる王も居ますしね」

微妙に笑うセツナに、私は苦笑を滲ませる。

「そうだな……」

セツナの話聞く為に、隣に座ったのだが……。

自分の胸のうちを、話している事に気がつく。

どうも、この青年はそういう雰囲気を持っているようだ。

「セツナは、これからどうするつもりなんだ？」

「予定としては、サガーナに向かいます」

「獣人の国か……」

「はい、ラギさんに頼まれた事もありますし。

アルトの事もありますから」

「サガーナには、船を使うのか？」

「いえ、もと来た道を戻ります。

洞窟を使って、クットまで戻ろうと思います」

「そうか……。セツナ……この国に仕える気はないか？」

私の言葉に、セツナは真直ぐ視線を私に合わす。

「今更、勧誘が来るとは思いませんでした」

「国王として、一度は言わなければならぬだろう？」

「確かに、そうかもしれませぬ」

セツナは、気を悪くした風でもなくこちらを見ている。

「僕は、今の所は何処の国にも仕える気はありません」

「そうだろうな。

気が変わったら、ぜひ我が国に……」

私がそう告げると、軽く笑い

「第一候補に入れておきますね」と軽く答えた。

彼に断られる事は、はじめから分かっていた事なのでこれ以上、この話題を続ける気はなかった。

昨日アルトが話していた、彼とトゥーリの話を聞こうかと口を開けかけたときに……セツナの眉間にしわが出来た。

彼のこういう表情を見るのは、初めてだ。
どうしたのかと、不思議に思っ て彼を凝視すると

「来ます。毎日場所を変えているのに……。
どうして、すぐに分かってしまふんでしょうね……」

セツナがそう告げてから、すぐに將軍が私達の前に現れた。

「セツナ！ なぜ何時も何時も場所を変える！
探すのが面倒だろうが！」

將軍の第一声が、セツナに対する文句だった。

「僕は、静かに飲みたいんです。

將軍が来ると、酒を出せとうるさいじゃないですか」

この2人の会話から、將軍がセツナの酒を当てにして
セツナを毎日探している事が伺えた……。

昔から、酒に対する情熱は凄まじかったからなつと
俯き、笑ってしまう。その笑いを聞きつけたセツナが

「国王様…… 笑い事ではないんですが……」

と少し不機嫌そうに、私を見た。

私とセツナが話している間に、將軍はもう腰を下ろしており
自分のカップを、セツナの前に出していた。

セツナはため息をつきながら、酒を注いでいる。
彼なら、誰にも見つからずに飲む事が出来るだろうに

そうしないのは、セツナを探している將軍を
無視する事が出来ないからだろうし

將軍は、將軍で私のようにどこかで彼が独りで飲んでいるのを見かけてから、探すようになったんだろう。

「今日の酒は、何処の酒だ？」

「レグリアのお酒です」

「ガーデイルの南の国か？」

「そうです」

「どういった国なんだ？」

「僕も行ったことが無いですから知りません」

「じゃあなぜ、酒を持っている？」

「珍しいお酒を見かけたら、購入しているんです」

「そうか……美味しいな！」

「……それはよかったですね」

「つまみを出せ！ つまみを！」

「僕は、食べ物を見たくありません」

「酒につまみは、欠かせないだろうが」

「僕は、いません」

「俺はいる!」

「……」

まあ……將軍は、酒が目当てなのもあるのかもしれないが……。しゅしゅ、カバンから食べ物を出しているセツナを見て微笑ましく思ってしまう。

「ドルフ……かなり前に、帰宅したと思ったのだが……?」

私が、將軍に声をかけると。彼を名前で呼んだからか意表をつかれたような表情を私に向け、そして笑った。

「1度帰った。今日は、ライナスがいて驚いたがな……」

私の意図を理解したのか、彼も私を名前で呼ぶ。

「お前と違って、偶然セツナを見つけた」

「俺は、セツナを探してた」

「……」

ドルフの言葉に

セツナが迷惑そうな視線を向けていたが、ドルフはお構い無しだ。他愛もない話をし、セツナが最後にこの国の酒をカバンから取り出す。

「その酒は、飲んだ事がある。」

珍しくないからな……そろそろ帰るとするか……」

そういつて、少し酔っているドルフは珍しい酒の瓶だけを
持って帰っていた。その後姿を、セツナは黒い笑いを浮かべ見送っ
ている。

「セツナ？」

その笑みの意味が分からない私がセツナを呼ぶと

「このお酒は、リペイドのものなのですが

120年ぐらい前のお酒なんですよ。生産量が少なかったみたいで
今は手に入れるのが難しいお酒です」

「……」

そう言つて、カバンから後2本取り出すと
後ろにいた私の騎士達に、1本ずつ渡す。

騎士達は、断っていたのだが私が許可すると素直に受け取っていた。

「国王様にも、1本差し上げます」

「いいのか？」

「まだありますから」

「前々から、気になっていたんだが
なぜそんなに酒を持っている？」

私の問いに、セツナはただ笑っただけだった。

私も、深く追求する事はなくその日は解散したのだが……。

後日私と、私の騎士2人は……ドルフに付きまといられる事となる……。

『夜の帳に注ぐ酒』(後書き)

読んでいただき有難うございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351u/>

刹那の風景 ～ 星の破片 ～

2011年8月19日10時35分発行